

〔第30回学術集会 シンポジウムII〕

大学組織内で働く期間に第三の家の構築に取り組み活動の紹介

香川大学医学部在宅看護学／一般社団法人つなぎまいYO

林 信平

現代社会において、平均寿命の延伸に伴い、退職後の人生が長くなっており、その質を向上させる取り組みが求められている。本講演では、大学組織で働く期間中に、家庭や職場とは異なる「第三の家」となる活動の場を構築する試みを紹介し、その現職中における効果や意義について検討し、退職後の活動の場となる可能性について言及する。

第三の家とは、仕事や家庭以外の社会参加や交流の場を意味する。私が代表を務める一般社団法人つなぎまいYOは、人と人とのつながりによる創発性で人々の健康に資する活動を行う団体として設立した。現在の主な活動は高齢者の低栄養防止活動Kumanと災害時要支援者の避難計画の作成等がある。

現職中における第三の家を持つ意義としては、まず、興味関心を共有する仲間と交流を図ることで、人的基盤を築くことができることにある。大学組織外でのこのような交流は、異なる職業の交流や、産官学の連携による新たな事業を促す可能性を持つ。

次に、専門知識やスキルを活用して社会貢献活動をすることも、第三の家を構築する利点の一つである。地域の企業や団体と連携し、講演会や定例のワークショップを開催することで、学生のボランティア教育活動と社会貢献を両立している。また、学生が卒業後も継続的に現役学生と活動できる場を提供し、相互の交流を促す場としての機能も期待している。

さらに、フィールドワークで新たな分野や技術を

学び、研究フィールドを作ることも、第三の家作りの利点である。新しい知識や人脈によって、発想された研究や実施が可能になるプロジェクトを推進することで、現職中の活動の幅が広がり、充実した研究環境を構築することが可能となる。

一方、退職後の活動の場としての可能性について、選択的情動性理論によると、高齢者はかつてから親交のある親しい人間関係に多くの時間と労力を使うようになると言われている。これは、人生の残り時間を充実させるには新たな人間関係作りというリスクをとるよりは、安心して付き合える人と一緒にいたいという感情が理由だとされている。

現職時代に活動を共にした仲間とは、退職後の人間関係の維持もしやすく、安心してコミュニティへの参加が可能になると思われる。そこで、自らが蓄えてきた知見や技術を活かすことができ、なおかつそれが、地域の健康に資するならこの上なく充実した老後といえるのではないだろうか。

本講演は、組織で働く期間中に「第三の家」作りに取り組みることが、現職中のみならず、退職後の充実した人生につながる可能性を提案しており、その実践方法や効果について有益な知見を提供することを期待している。大学組織は、このような研究と社会貢献と教育を推進する教員の「第三の家」作りを支援し、働く期間中から退職後の活動の場を整備することが、教員の研究活動を推進し、幸福度や働く意欲の向上に繋がると考えられる。